

# 男性役割期待とそれに基づく行動および精神的健康との関連 — 2つの男性役割行動の間で —

奥澤 遼 太\*・五十嵐 透 子\*\*  
(令和6年1月17日受付；令和6年4月12日受理)

## 要 旨

本研究では、青年期から成人期の男性を対象に、大学生活や仕事、パートナーとの生活などで男性役割が求められる場面での、周囲からの男性役割の期待に対する認知状態と、男性役割行動の実施状態を測定し、2つの間の一致度と精神的健康との関連を明確にすることを目的とした。Googleフォームと質問紙調査によって得られた18-38歳（平均23.37歳）263名の男性を対象に、2つの男性役割行動と就労経験および同棲経験の有無を含めた分析を行った。主な結果と考察として、実施状態のそれぞれの側面で精神的健康と関連することが示され、期待認知度よりも実行度の方が精神的健康と関連していることが考えられた。また、新しい男性役割の「強さからの解放」や伝統的男性役割の「心身ともに強い」のように心身の強さに関する男性役割が、特に精神的健康と関連する可能性が示唆され、実際に心身の弱さを示すことは精神的健康度を低めることに関連すると思われた。一方で、心身の強さに対する周囲からの期待の大きさよりも、心身の強さを示せることが精神的健康度を高めることに関連することが考えられた。また、「心身の強さは必要ではない」という態度を有していることと、「心身の強さは必要ではない」と周囲から期待されていると認知することによって、心身の強さについての葛藤が減少し、精神的健康度と正の関連が示されたと思われる。性別役割期待の認知との調整の状態をより明らかにする必要性を考察した。

## KEY WORDS

伝統的な男性役割 traditional male role, 新しい男性役割 new male role  
周囲からの期待認知 perception of expectations from others, 精神的健康 mental health

## 1 問題と目的

人は社会生活を送るうえで、性別に合わせて「男／女らしい」行動を求められるが、それは社会的に期待される男女それぞれにふさわしい行動や特徴として「性別役割」とされている<sup>(1)</sup>。性別役割の例として「男性は仕事、女性は家事」「男性は意見を主張し、リーダーシップを発揮する」「女性は従順で、おしとやかにする」などが挙げられるとともに、男性の方が女性よりもこれらの性別役割態度を有することが示されている<sup>(2)</sup>。加えて、これらの男性役割をとる男性は、女性役割をとる女性に比べて社会的にポジティブに評価され、男性役割行動は社会的に望ましいものとされてきている<sup>(3)</sup>。その一方で、男性がこれらの男性役割行動をとらない場合、女性が女性役割行動をとらない場合よりも、よりネガティブな評価を受けたり不当に扱われたりすることが明らかとなっている<sup>(4)</sup>。

しかし、社会文化的に変化を続ける日々の生活の中で、性別役割行動も時代の変遷の影響を受けている。「男性は仕事、女性は家事」というような性別役割態度について、内閣府の調査<sup>(5)</sup>では、否定的な人の割合が増加傾向であることが示されている。加えて、女性の社会進出に伴い、女性から男性への役割の期待は変化し、男性には外で仕事をする 것과同時に、家庭内での家事や育児の役割を求められるようになってきていることも明らかにされている<sup>(6)</sup>。しかし、総務省統計局の共働き世帯の家事関連時間に関する調査では、夫婦の家事の時間には依然として開きがあり<sup>(7)</sup>、男性の家庭での役割には大きな変化はみられておらず、役割の期待と現実の間のずれが生じていることが推測できる。

これらの男性役割の変化とそれに伴う関係満足度や精神的健康との関連の検討が進んでおり、共働き夫婦を対象とした研究<sup>(8)</sup>では、仕事と家庭への参加の選択に葛藤を抱えている男性は、結婚満足度や精神的健康度が低いことが示されている。伊藤・相良・池田<sup>(9)</sup>の子育てをしているカップルを対象にした研究でも、妻が就労している夫は、家事や育児を行うほど夫婦関係満足度と精神的健康度が高いことが示されている。男性役割が多様化し、男性が従来の役割に加えて仕事も家事も期待されるような新たな役割を求められることは、精神的健康にポジティブにもネガティブ

にも影響する可能性が推察される。

男性役割が多様化している状態への理解において、Pleck<sup>(10)</sup>の男性役割の2つの分類が役立つ。1つは他者とのつながりや男女関係における親密さを避け、攻撃的な言動や女性を支配し従わせることも期待されている「伝統的な男性役割」で、もう1つは仕事での円滑なコミュニケーションに必要となる対人関係のスキルや、恋愛関係でのやさしさや親密さが求められる「現代的な男性役割」である。伝統的な男性役割の特徴については、国内外でさまざまな研究が行われ、海外では男性役割の側面について複数の因子から研究されてきたが、国内では「男性性」の1因子のみの研究が中心であった。渡邊<sup>(11)</sup>はこの点を問題視し、“伝統的な男性役割態度尺度”を開発した。伝統的な男性役割態度尺度の第1因子は、稼ぎ手として社会的な成功を収めていることを示す「社会的地位の高さ」、第2因子は心身ともに頑強で、辛いことがあっても耐えて表出しないことを示す「精神的・肉体的な強さ」、第3因子は他者に依存せずに目標達成のために努力すること、指導力があり頼りになることを示す「作動性の高さ」、第4因子は女性的な言動や同性愛的な言動を避けることを示す「女性的言動の回避」、そして第5因子は女性に対して積極的に性的関係を持ち女性を従わせることを示す「女性への優位性」である。

Pleck<sup>(10)</sup>の「現代的な男性役割」を渡邊<sup>(11)</sup>は“新しい男性役割”と表現し、伝統的な男性役割と新しい男性役割を区別して研究する必要性を指摘し、“新しい男性役割尺度”を開発している。新しい男性役割尺度の第1因子は、家事や育児などの家庭役割に積極的に参加するとともに、仕事と家事を両立することを示す「家庭への参加」、第2因子は経済的な地位からの解放や感情表出の許容など、自分が他者よりも弱い存在であることを肯定することを示す「強さからの解放」、第3因子はコミュニケーション力の高さや温かさ、やさしさなど、対人関係の維持を優先することを示す「他者への配慮」、そして第4因子は女性にやさしくしたり、尽くしたりすることを示す「女性への気遣い」である。このような2側面での男性役割をとらえる研究が進む中で、新しい男性役割に関する研究は国内外ともに多くない。

これら2つの男性役割とさまざまな要因に関し、男性を対象とした検討の中で、私生活での恋愛関係満足度との関連の検討では、「家庭への参加」と「精神的・肉体的な強さ」および「女性的言動の回避」が高い状態は、恋人との関係満足度が高い結果が示されている<sup>(12)</sup>。しかし、恋人の女性から気遣うことを期待されていると認知していると関係満足度が低い状態であった。職場での男性役割と精神的健康の関連では、伝統的な男性役割としての頼りがいのある行動をとることを期待され、女性への気遣いを不要と考えている状態は、精神的健康度が低かった<sup>(13)</sup>。就職している社会人男性と男性大学生の男性役割意識の比較では、社会人男性は仕事と家事の場面で男性役割を意識しやすく、大学生はグループ内でリーダーシップをとることや将来の職業のことを考える場面で男性役割を意識しやすいことが示されている<sup>(14)</sup>。これらの結果は、新しい男性役割だけでなく伝統的な男性役割についても、それぞれの側面ごとに精神的健康にポジティブにもネガティブにも関連することが考えられる。さらに先行研究は、個人が持つ男性役割に対する態度と、周囲からの期待に関し、精神的健康との関連を検討したもののみである。周囲からの男性役割の期待と、実際の行動との差の程度は、精神的健康に関連することが示唆されており<sup>(6)</sup>、男性役割に対する態度や精神的健康との関連だけでなく、期待と実際の行動を組み合わせる関連を検討する必要があると考える。特に青年期の男性は、学生から社会人に移行し、私生活および社会生活で男性役割に疑問や葛藤を抱きやすい<sup>(12)</sup>ことから、重要と思われる。

そこで本研究では、青年期から成人期までの男性を対象に、大学生活や仕事、パートナーとの生活などの男性役割が求められる場面で、2つの男性役割の状態と周囲からの期待の関連を精神的健康も含めて検討し、支援のための知見の蓄積を目的とする。以下に仮説を示す。

仮説1：周囲からの男性役割の期待と男性役割に沿った行動の程度に差がある男性が、差が無い男性よりも、有意に精神的健康度が低い。

仮説2：周囲からの男性役割の期待認知度は、精神的健康度の低い男性が高い男性よりも有意に高い。

仮説3：伝統的な男性役割に沿った行動は、精神的健康度の低い男性が高い男性よりも有意に行う。

仮説4：新しい男性役割に沿った行動は、精神的健康度の高い男性が低い男性よりも有意に行う。

## 2 方法

### 2.1 調査対象者と調査時期および調査方法

SNSを利用した機縁法を用いて、国内在住の大学生から30代までの男性を調査対象として、2020年8月下旬から10月にかけての2か月間で実施した。SNSでURLを配布し研究協力への依頼を行い、Googleフォームと質問紙による調

査を行った。

## 2. 2 調査内容

(1) デモグラフィック要因：性別、年齢、学生か否か、就労経験の有無、異性やパートナーと暮らした経験の有無を訊ねた。

(2) 男性役割の期待認知度：男性役割に関する周囲からの期待認知度を測定するために、渡邊<sup>(11)</sup>が開発した“伝統的な男性役割態度尺度”と“新しい男性役割尺度”を、臨床心理学を専門とする教員1名と大学院生4名で検討し、男性役割に関する周囲からの期待認知度を測定するために、文末のみを変更して使用した。全36項目で、教示は「あなたは、以下の項目を、周りの人や社会からどのくらい求められますか、あるいは求められていると感じますか」とし、「1. 全く求められない」から「5. 強く求められる」の5件法で訊ねた。

(3) 男性役割の実行度：男性役割に関する実施状態を測定するために、渡邊・松井<sup>(12)</sup>が作成した周囲から期待されていると認知している男性役割を訊ねる質問項目を参考に、(2)と同じように検討し、男性役割に関する実施状態を測定するために、伝統的な男性役割の5因子と新しい男性役割の4因子に対応した9項目を作成して使用した。具体的には、社会的地位の高さは「一家の稼ぎ手になる」、精神的・肉体的な強さは「心身ともに強い」、作動性の高さは「リーダーシップをとる」、女性的言動の回避は「女性的な振る舞いをしない」、女性への優位性は「女性をリードする」、女性への気遣いは「女性に対して紳士的な対応をする」、家庭への参加は「家事や育児を行う」、他者への配慮は「他者を思いやり接する」、強さからの解放は「辛いときには弱音を吐く」とした。また、「一家の稼ぎ手になる」と「家事や育児を行う」の2項目は、異性やパートナーと暮らした経験の無い人は、想定した回答になるため、これら2項目の教示は異なるものを作成した。具体的には「異性あるいはパートナーと一緒に暮らした経験のある方は、以下の項目にどのくらいあてはまりますか」と「異性あるいはパートナーと一緒に暮らした経験のない方は、暮らした場合、以下の項目を、どのくらい行うと思いますか」とした。5件法で回答を求め、「1. 全くあてはまらない」から「5. ととてもあてはまる」とし、得点が高いほど実施頻度が多いことを示すようにした。

(4) 抑うつ幸福感尺度：McGreal & Joseph<sup>(13)</sup>が開発したDepression-Happiness Scaleを土田・五十嵐<sup>(16)</sup>が翻訳したものを使用した。「抑うつ傾向」と「主観的幸福感」の2因子構造を想定し、5件法で訊ねた。

その他、「男らしさ」や「男性役割」に関する思いについて自由記述で回答を求めたが、本研究では分析しないため、詳細は省略する。

## 2. 3 倫理的配慮

上越教育大学研究倫理審査委員会の承認を得て実施した（承認番号：2020-12）。Googleフォームと質問紙は無記名とし、調査への参加は任意であり、参加しなくても何ら不利益の無いこと、いつでも中断できることを最初に提示した。

## 3 結果

### 3. 1 分析対象および分析方法

287名の回答を得た。そのうち性別で男性以外を選択した回答や欠損値のある回答を除外し、263名（91.64%）を分析対象とした。また、男性役割には、家庭や組織における就労経験の影響があることを考慮し、現在働いている人と過去に働いていた人を「就労経験あり群」、働いたことがない人を「就労経験なし群」とした。同様に、現在婚姻関係にある人や同棲している人と過去に婚姻関係にあった人や同棲していた人を「同棲経験あり群」、したことがない人を「同棲経験なし群」とした。分析には「IBM SPSS Statistic 25.0」と「IBM SPSS Amos 25.0」を使用した。

### 3. 2 尺度の信頼性と妥当性の検討

伝統的男性役割の期待認知度では、2項目に床効果がみられたが、女性的言動の回避の高さを測る上で必要な項目であるため、除外せずに使用した。また、1項目で天井効果がみられたが、社会的地位に対する思いを測る上で必要な項目であるため、除外せずに分析に用いた。渡邊<sup>(1)</sup>の5因子構造のモデルで確認的因子分析を行った。全ての項目の標準化推定値が有意であったが、十分な適合度は得られなかった（ $X^2(162)=488.95$ , GFI=.84, AGFI=.79, CFI=.80, RMSEA=.90, AIC=584.95）。Cronbachの $\alpha$ 係数は、「社会的地位の高さ」（ $\alpha=.67$ ）、「精神的・肉体的な強さ」（ $\alpha=.68$ ）、「作動性の高さ」（ $\alpha=.66$ ）、「女性的言動の回避」（ $\alpha=.70$ ）、「女性に対する優位性」（ $\alpha=.74$ ）

であった。十分な適合度は得られなかったが、内的整合性の値と研究知見の蓄積の観点から、5因子構造が妥当であると判断し、各因子の4項目の平均値を各下位尺度得点として後の分析に用いた。なお、渡邊<sup>(1)</sup>では「女性への優位性」であったが、「女性に対する優位性」の方がより適切に状態を表していると判断し変更した。

新しい男性役割の期待認知度では、探索的因子分析（最尤法、Promax回転）を行った。「家庭への参加」の2項目で因子負荷量が.35を下回ったが、家庭での役割である家事や育児を行う期待の測定に必要な項目であるため、削除せずに分析に使用した。渡邊と同様の因子構造となり、Cronbachの $\alpha$ 係数は「女性への気遣い」( $\alpha = .72$ )、「家庭への参加」( $\alpha = .64$ )、「他者への配慮」( $\alpha = .83$ )、「強さからの解放」( $\alpha = .74$ )と十分な内的整合性が確認された。各因子の平均値を各下位尺度得点として、後の分析に用いた。

男性役割の実行度では、Cronbachの $\alpha$ 係数は「伝統的男性役割の実行度」( $\alpha = .56$ )、「新しい男性役割の実行度」( $\alpha = .52$ )であった。それぞれの項目は合計せず、項目ごとに項目得点として後の分析に用いた。

### 3.3 男性役割のずれの因子得点に基づく群分け

男性役割の実行度の各下位項目得点と期待認知度の各下位尺度得点をZ得点化し、実行度から対応する期待認知度を引いて「男性役割のずれ得点」とし、実行度が期待認知度より高いほど正の値となり、期待認知度が実行度より高いほど負の値となるようにした。9つのずれ得点の探索的因子分析（最尤法、Promax回転）により、3つの因子にまとまった。また、実行度と期待認知度の「精神的・肉体的な強さ」「女性に対する優位性」「女性への気遣い」「女性的言動の回避」を逆転項目とし、それぞれの得点が高いほど、男性役割にとらわれない態度の実行度や期待認知度が高くなるように配点した。1つ目の因子は「精神的・肉体的な強さ」「作動性の高さ」「女性に対する優位性」「女性への気遣い」「他者への配慮」で構成されており、強さとやさしさを兼ね備え、全般的な対人関係の役割で構成されていることから、「社会生活でのずれ」因子と命名した。2つ目は「社会的地位の高さ」と「家庭への参加」で構成されており、家庭内での役割で構成されていることから、「家庭生活でのずれ」因子と命名した。3つ目は「女性的言動の回避」と「強さからの解放」で構成されており、心身の強さを状況に合わせて示すことを表していることから「コミュニケーション・スタイルでのずれ」因子と命名した。それぞれの因子得点を平均値 $\pm 0.5SD$ で3群に区切り、平均値 $+0.5SD$ 以上を実行優位群、平均値 $-0.5SD$ 以下を期待優位群、それ以外を同程度群とした。

### 3.4 各尺度の下位尺度間の相関関係の検討

男性役割のずれ、期待認知度、実行度の得点それぞれと抑うつ幸福感尺度の得点間でPearsonの積率相関係数を求めた（表1）。男性役割のずれでは、「社会生活でのずれ」と「コミュニケーション・スタイルでのずれ」が「主観的幸福感」と弱い負の関連がみられた。「社会生活でのずれ」と「コミュニケーション・スタイルでのずれ」が「抑うつ傾向」と弱い正の関連がみられた。

男性役割の期待認知度では、「作動性の高さ」と「強さからの解放」が「主観的幸福感」と弱い正の関連がみられた。一方、男性役割の実行度では、伝統的男性役割の4因子と新しい男性役割の2因子が「主観的幸福感」と弱から中程度の正の関連がみられた。「心身ともに強い」と「リーダーシップをとる」が「抑うつ傾向」と弱い負の関連がみられ、「辛いときには弱音を吐く」が「抑うつ傾向」と弱い正の関連がみられた。

### 3.5 男性役割とデモグラフィック要因および精神的健康の関連の検討

まず、抑うつ幸福感尺度の「抑うつ傾向」と「主観的幸福感」の組み合わせの検討を行った。「抑うつ傾向」と「主観的幸福感」が男性役割のそれぞれの状態と関連していることが示されたが、就労経験および婚姻関係や同棲経験と組み合わせで検討することにより、より詳細

表1

男性役割の期待認知度、実行度、ずれと抑うつ幸福感尺度の相関分析

	抑うつ幸福感尺度	
	抑うつ傾向	主観的幸福感
<b>伝統的な男性役割の期待認知度</b>		
社会的地位の高さ	.09	.05
精神的・肉体的な強さ	.03	-.05
作動性の高さ	-.01	.22 ***
女性的言動の回避	.06	-.06
女性に対する優位性	.10	.06
<b>新しい男性役割の期待認知度</b>		
女性への気遣い	.03	.09
家庭への参加	.04	.07
他者への配慮	.04	.01
強さからの解放	.07	.20 ***
<b>伝統的な男性役割の実行度</b>		
一家の稼ぎ手になる	-.09	.13 *
心身ともに強い	-.27 ***	.36 ***
リーダーシップをとる	-.15 *	.43 ***
女性的な振る舞いをしない	-.05	.02
女性をリードする	-.10	.33 ***
<b>新しい男性役割の実行度</b>		
女性に対して紳士的な対応をする	-.06	.25 ***
家事や育児を行う	.00	.10
他者を思いやり接する	-.08	.23 ***
辛いときには弱音を吐く	.17 **	.06
<b>男性役割のずれ</b>		
社会生活でのずれ	.13 *	-.17 **
家庭生活でのずれ	-.11	.06
コミュニケーション・スタイルでのずれ	.13 *	-.14 *

\*\*\* $p < .001$ , \*\* $p < .01$ , \* $p < .05$

に男性役割のそれぞれの状態を検討することができると考えた。しかし、群分けによる人数が10人未満になることから、「抑うつ傾向」を逆転項目として「主観的幸福感」と合算し、「精神的健康」の1因子として、得点が高いほど精神的健康度が高くなるように配点し、平均値を基準に高群と低群の2群に区分して後の分析に用いた。

次に、男性役割のずれと就労経験および精神的健康の2要因分散分析では、「コミュニケーション・スタイルでのずれ」が独立変数の際に、男性役割のずれで主効果がみられた ( $F(2, 256)=5.62, p<.01$ )。Tukey法の多重比較(5%水準)では、同程度群と期待優位群が実行優位群よりも精神的健康が有意に高かった(表2)。

男性役割のずれと同棲経験および精神的健康の2要因分散分析では、「社会生活でのずれ」「家庭生活でのずれ」「コミュニケーション・スタイルでのずれ」の3つ全てで同棲経験の主効果がみられた ( $F(1, 257)=6.88, p<.01$ ;  $F(1, 257)=10.42, p<.001$ ;  $F(1, 257)=7.62, p<.01$ )。3つともに同棲経験あり群がなし群よりも精神的健康が有意に高かった。また、「家庭生活でのずれ」と「コミュニケーション・スタイルでのずれ」では、男性役割のずれで主効果がみられた ( $F(2, 257)=3.18, p<.05$ ;  $F(2, 257)=4.97, p<.01$ )。Tukey法の多重比較(5%水準)では、「家庭生活でのずれ」では有意差がみられなかったが、「コミュニケーション・スタイルでのずれ」では同程度群と期待優位群が実行優位群よりも精神的健康が有意に高かった(表3)。

表2  
男性役割のずれの3群と就労経験の有無および精神的健康の2要因分散分析 (N=262)

男性役割のずれ	精神的健康	就労経験						F値			男性役割のずれの多重比較
		あり			なし			主効果		交互作用	
		①実行優位	②同程度	③期待優位	①実行優位	②同程度	③期待優位	就労経験	男性役割のずれ		
<i>n</i>		51	80	45	32	22	32				
社会生活でのずれ	<i>M</i>	72.45	83.05	79.76	77.88	78.36	81.28	0.09	2.12	1.33	
	<i>SD</i>	17.73	20.64	18.40	17.29	16.20	19.63				
	<i>n</i>	54	77	45	24	36	26				
家庭生活でのずれ	<i>M</i>	82.06	77.62	78.22	82.13	81.19	73.96	0.01	1.65	0.83	
	<i>SD</i>	17.37	20.15	21.45	15.16	17.68	19.65				
コミュニケーション・スタイルでのずれ	<i>n</i>	49	71	56	26	34	26				
	<i>M</i>	72.61	81.92	81.32	72.96	80.91	83.42	0.04	5.62 **	0.14	②, ③>①
	<i>SD</i>	19.85	18.15	20.41	18.67	16.56	17.44				

\*\* $p<.01$

表3  
男性役割のずれの3群と同棲経験の有無および精神的健康の2要因分散分析 (N=263)

男性役割のずれ	精神的健康	同棲経験						F値			男性役割のずれの多重比較
		あり			なし			主効果		交互作用	
		①実行優位	②同程度	③期待優位	①実行優位	②同程度	③期待優位	同棲経験	男性役割のずれ		
<i>n</i>		12	25	15	72	77	62				
社会生活でのずれ	<i>M</i>	84.92	87.44	83.83	72.79	80.29	79.55	6.88 **	0.97	0.50	
	<i>SD</i>	14.32	18.06	25.68	17.52	20.11	16.90				
	<i>n</i>	14	16	22	64	97	50				
家庭生活でのずれ	<i>M</i>	93.50	87.69	79.59	79.58	77.29	75.30	10.42 ***	3.18 *	0.92	①=②=③
	<i>SD</i>	11.94	20.66	21.23	16.52	18.88	20.43				
コミュニケーション・スタイルでのずれ	<i>n</i>	14	17	21	61	89	61				
	<i>M</i>	77.14	90.47	87.86	71.72	79.80	79.97	7.62 **	4.97 **	0.26	②, ③>①
	<i>SD</i>	22.34	17.41	18.18	18.62	17.10	19.58				

\*\*\* $p<.001$ , \*\* $p<.01$ , \* $p<.05$

次に、精神的健康と就労経験および男性役割の期待認知度の多変量分散分析では、伝統的男性役割と新しい男性役割ともに、主効果と交互作用ともに有意差はみられなかった。

精神的健康と同棲経験および男性役割の期待認知度の多変量分散分析では、伝統的男性役割は主効果と交互作用ともに有意差はみられなかったが、新しい男性役割では、同棲経験の主効果がみられた ( $F(4, 256)=2.76, p<.05$ )。Bonferroni法の多重比較(1.25%水準)では、「家庭への参加」で、同棲経験あり群がなし群よりも有意に高かった ( $F(1, 259)=6.59, p<.0125$ ) (表4)。

加えて、精神的健康と就労経験および男性役割の実行度の多変量分散分析では、伝統的男性役割で精神的健康の主効果がみられた ( $F(5, 254)=3.38, p<.01$ )。Bonferroni法の多重比較(1.00%水準)では、「心身ともに強い」と

「女性的な振る舞いをしない」で、精神的健康高群が低群よりも有意に高かった ( $F(1, 258)=11.53, p<.001$ ;  $F(1, 258)=7.09, p<.01$ )。新しい男性役割では、就労経験の主効果と交互作用がみられ ( $F(4, 255)=3.08, p<.05$ ;  $F(4, 255)=2.78, p<.05$ ) Bonferroni法の多重比較 (1.25%水準) では、就労経験による主効果の有意差はみられなかったが、「家事や育児を行う」の交互作用で有意差がみられた ( $F(1, 258)=9.06, p<.01$ )。単純主効果の検定では、就労経験なし群で精神的健康の主効果が有意であり、精神的健康低群が高群より有意に高かった ( $F(1, 258)=4.20, p<.05$ )。就労経験あり群では、精神的健康の主効果が有意であり、精神的健康高群が低群よりも有意に高かった ( $F(1, 258)=5.38, p<.05$ )。また、精神的健康低群で、就労経験の主効果が有意であり、就労経験なし群があり群より有意に高かった ( $F(1, 258)=8.03, p<.01$ ) (表5)。

表4  
精神的健康の高低と同棲経験の有無および男性役割の期待認知の多変量分散分析

	精神的健康 同棲経験 (N=263)	高群		低群		F値		
		あり (n=37)	なし (n=100)	あり (n=15)	なし (n=111)	主効果		
						精神的健康	同棲経験	交互作用
新しい男性役割の期待認知								
女性への気遣い	M SD	2.63 0.92	2.65 0.88	2.65 0.90	2.70 0.84	0.05	0.06	0.01
家庭への参加	M SD	3.06 0.81	2.75 0.85	3.13 0.76	2.73 0.84	0.05	6.59*	0.09
他者への配慮	M SD	3.87 1.00	3.96 0.62	3.87 0.62	3.86 0.80	0.17	0.09	0.14
強さからの解放	M SD	3.08 0.82	2.99 0.75	2.72 0.84	2.82 0.79	4.11	0.00	0.55

\* $p<.0125$

表5  
精神的健康の高低と就労経験の有無および男性役割の実行度の多変量分散分析

	精神的健康 就労経験 (N=262)	高群		低群		F値		
		あり (n=93)	なし (n=44)	あり (n=83)	なし (n=42)	主効果		
						精神的健康	就労経験	交互作用
伝統的男性役割の実行度								
一家の稼ぎ手になる	M SD	3.91 0.94	3.82 1.19	3.69 1.00	3.74 1.08	1.29	0.03	0.30
心身ともに強い	M SD	3.32 1.09	3.16 0.91	2.75 1.11	2.76 1.21	11.53 **	0.27	0.39
リーダーシップをとる	M SD	3.42 1.15	3.20 1.11	2.87 1.15	2.95 1.17	7.09 *	0.19	0.99
女性的な振る舞いをしない	M SD	2.82 1.22	3.11 1.10	2.83 1.19	2.67 0.98	2.02	0.19	2.29
女性をリードする	M SD	3.30 1.09	3.14 1.03	2.92 1.17	3.21 1.00	1.14	0.22	2.59
新しい男性役割の実行度								
女性に対して紳士的な対応をする	M SD	3.83 0.85	3.57 0.85	3.69 0.99	3.43 1.21	1.23	4.19	0.00
家事や育児を行う	M SD	3.97 0.93	3.72 0.90	3.64 1.04	4.14 0.78	0.12	1.14	9.06 *
他者を思いやり接する	M SD	4.25 0.78	4.25 0.65	4.01 0.83	4.14 0.87	2.77	0.42	0.39
辛いときには弱音を吐く	M SD	3.08 1.13	3.09 1.07	3.06 1.16	3.40 1.21	0.99	1.43	1.20

\*\* $p<.001$ , \* $p<.01$

精神的健康と同棲経験および男性役割の実行度の多変量分散分析では、伝統的男性役割で精神的健康と同棲経験の主効果がみられた ( $F(5, 255) = 2.94, p<.05$ ;  $F(5, 255) = 5.23, p<.001$ )。Bonferroni法の多重比較 (1.00%水準) では、「一家の稼ぎ手になる」と「心身ともに強い」で、精神的健康高群が低群よりも有意に高かった ( $F(1, 259) = 8.02, p<.01$ ;  $F(1, 259) = 8.04, p<.01$ )。また、「一家の稼ぎ手になる」で同棲経験なし群があり群より有意に高く ( $F(1, 259) = 13.64, p<.001$ )、「リーダーシップをとる」で同棲経験あり群がなし群より有意に高かった ( $F(1, 259) = 6.76, p<.01$ )。新しい男性役割では、主効果、交互作用ともに有意差はみられなかった (表6)。

表 6  
精神的健康の高低と同棲経験の有無および男性役割の実行度の多変量分散分析

	精神的健康		高群		低群		F値		
	同棲経験 (N=263)	あり (n=37)	なし (n=100)	あり (n=15)	なし (n=111)	主効果			
						精神的健康	同棲経験	交互作用	
伝統的男性役割の実行度									
一家の稼ぎ手になる	M	3.68	3.96	2.87	3.82	8.02 *	13.64 *	3.98	
	SD	1.25	0.92	1.19	0.95				
心身ともに強い	M	3.32	3.25	2.80	2.74	8.04 *	0.14	0.00	
	SD	1.25	0.95	1.21	1.13				
リーダーシップをとる	M	3.65	3.24	3.40	2.82	3.09	6.76 *	0.20	
	SD	1.09	1.15	1.18	1.13				
女性的な振る舞いをしない	M	2.65	3.01	2.73	2.79	0.12	1.17	0.60	
	SD	1.25	1.16	1.33	1.10				
女性をリードする	M	3.38	3.20	3.33	2.97	0.55	2.16	0.25	
	SD	1.11	1.05	1.40	1.07				

\* $p < .01$

#### 4 考察

本研究では、男性が体験している2つの性別役割に対する周囲からの期待に関する認知状態と実施状態を測定し、期待認知度と実施状態間のずれの状態と精神的健康との関連を検討した。期待認知度と実施状態の間にはずれがあることが示され、期待認知度、実施状態、ずれのそれぞれで精神的健康と関連があることが示された。

「社会生活でのずれ」と「コミュニケーション・スタイルでのずれ」は「主観的幸福感」と弱い負の関連がみられ、「抑うつ傾向」とは弱い正の関連がみられた。これは期待認知度よりも実行度が高いほど精神的健康度が低いことを示している。また、「コミュニケーション・スタイルでのずれ」は同程度群と期待優位群が実行優位群よりも精神的健康が有意に高く、仮説1の一部を支持する結果であった。「コミュニケーション・スタイルでのずれ」の結果については、必ずしも心身の強さが必要ではないという考えを有することで精神的健康度が高かった渡邊他<sup>(12)</sup>と、実際に心身の弱さをみせることは精神的健康度が低かった渡邊<sup>(13)</sup>の知見を踏まえ、実際に心身の弱さを示すことは精神的健康度を低めることになると思われる。加えて、周囲からの心身の強さの期待の大きさよりも心身の強さを示せることが精神的健康度を高めることに関連すると思われる。男性役割の中でも特に心身の強さに関する役割が精神的健康に影響する可能性が示されたとともに、男性役割に対する期待認知よりも実行度の方が精神的健康に影響する可能性が示されたと思われる。

「作動性の高さ」と「強さからの解放」は「主観的幸福感」と弱い正の関連がみられた。一方で、精神的健康と期待認知度の分散分析では有意差はみられず、仮説2は支持されなかった。特に相関分析の結果は、期待認知度の下位尺度によっては精神的健康と正の関連が存在することを示唆している。これは、恋人の女性から気遣うことを期待されていると認知していると恋人関係満足度が低く、心身の強さは必ずしも必要ではないと考えていると関係満足度が高かった渡邊他<sup>(12)</sup>の研究の一部と同様であった。一方で、職場で男らしさや頼りがいのある行動をとることが期待されていると体験すると精神的健康度が低かった渡邊<sup>(13)</sup>の研究とは異なる結果である。「作動性の高さ」と精神的健康に弱い正の関連がみられた要因として、渡邊・松井・佐藤<sup>(14)</sup>では、青年期の男性はリーダーシップを重視する可能性との関連を考察している。「作動性の高さ」は、リーダーシップをはじめとして明確な自己表現や冷静な言動などの項目で測定されており、他の男性役割よりも他者から頼られる役割を周囲から重視され、精神的健康と正の関連が示されたと考える。また、「強さからの解放」と精神的健康に弱い正の関連がみられた要因として、心身の強さを必要ではないという態度を有しているという関係満足度が高かった渡邊他<sup>(12)</sup>の研究を踏まえ、本研究では、「心身の強さは必要ではない」という態度を有していること、それと同時に、「心身の強さは必要ではない」と周囲から期待されていると認知することによって心身の強さについての葛藤が減少し、精神的健康度と正の関連が示されたと考える。加えて、「強さからの解放」は恋人との関係というプライベートな場で関係満足度との関連がみられた。推察の域だが、職場のような公的な場では「強さからの解放」は伝統的な男性役割に沿わないことで、ネガティブに影響することも考えられる。

「一家の稼ぎ手になる」「心身ともに強い」「リーダーシップをとる」「女性をリードする」は「主観的幸福感」と弱から中程度の正の関連がみられ、「心身ともに強い」と「リーダーシップをとる」は「抑うつ傾向」とは弱い負の関連がみられた。また、「一家の稼ぎ手になる」「心身ともに強い」「リーダーシップをとる」で精神的健康高群が低

群よりも実行度が有意に高く、仮説3は支持されなかった。その要因として、ネガティブな評価は伝統的男性役割に沿った行動をとらない男性が受けやすいことから<sup>(4)</sup>、伝統的男性役割に沿った行動をとることでネガティブな評価を受けることを避けることになり、不安を抱きにくく、精神的健康度の高い男性が低い男性よりも実行度が高くなった可能性が考えられる。

「女性に対して紳士的な対応をする」と「他者を思いやり接する」は「主観的幸福感」と弱い正の関連がみられ、「辛いときには弱音を吐く」は「抑うつ傾向」と弱い正の関連がみられた。また、「家事や育児を行う」で精神的健康と就労経験の交互作用がみられ、就労経験あり群では精神的健康高群が低群よりも実行度が有意に高く、就労経験なし群では精神的健康低群が高群よりも実行度が有意に高かった。これらの結果により、仮説4の一部は支持された。これは、妻が就労している夫は家庭生活に参加するほど、夫婦関係満足度と精神的健康が高い結果を示した伊藤・相良・池田<sup>(9)</sup>や、新しい男性役割と弱音を吐かないことや女性的な言動をしないことが高い状態は恋人関係満足度が高かった渡邊他<sup>(12)</sup>と同様の結果と考える。本研究では、就労経験がある男性は精神的健康度高群が低群よりも「家事や育児を行う」ことが有意に高く、「辛いときには弱音を吐く」ことは伝統的男性役割に沿わない行動であることから、抑うつ傾向と弱い正の関連がみられたと思われる。

本研究の限界として、男性役割の実行度の項目数が挙げられる。質問項目数が増えて協力者の負担が増えることを避けるために、9項目を作成して用いた。結果では、期待認知度よりも実行度の方が精神的健康度と関連していることが示唆されており、今後は男性役割の実行度について詳細に検討していく必要があると考える。加えて、男性役割のずれの算出方法について、実行度を9項目としたことで、期待認知度の項目数とは異なり、簡潔な方法を用いることができなかった点が挙げられる。実行度の項目数と合わせて、期待認知度と実行度の差の算出方法について検討していく必要がある。また、調査人数の限界から、男性役割のずれについては、3因子にまとめて検討を行った。実行度の結果からはそれぞれの側面で精神的健康と関連することが考えられる。そのため、調査人数を増やすなどして、男性役割の9つの側面から詳細に検討していく必要があると考える。

## 謝辞

本研究は修士論文で行った研究であり、質問への回答にご協力いただいた皆様に感謝申し上げます。加えて、日本心理学会第86回大会でもポスター発表をしており、様々なフィードバックを寄せていただいた皆様にも合わせて感謝申し上げます。

## 引用文献

- (1) 渡邊 寛 (2017). 伝統的な男性役割態度尺度の作成と信頼性・妥当性の検証 心理学研究, 88, 488-498.
- (2) 東 清和・鈴木 淳子 (1991). 性役割態度研究の展望 心理学研究, 62, 270-276.
- (3) 伊藤 裕子 (1978). 性役割の認知に関する研究 教育心理学研究, 26, 1-11.
- (4) Moss-Racusin, C.A., Phelan, J.E., & Rudman, L.A. (2010). When men break the gender rules: Status incongruity and backlash against modest men, *Psychology of Men and Masculinity*, 11, 140-151.
- (5) 内閣府 (2014). 「女性の活躍推進に関する世論調査」の概要 女性の活躍推進に関する世論調査 Retrieved from <http://survey.govonline.go.jp/h26/h26-joseikatsuyaku/gairyaku.pdf> (2020年6月3日)
- (6) 渡邊 寛・松井 豊 (2016). 新しい男性役割の側面に関する探索的検討 筑波大学心理学研究, 52, 85-95.
- (7) 総務省統計局 (2016). 生活時間に関する結果の概略 平成28年社会生活基本調査一調査の結果 結果の概要一 Retrieved from <http://www.stat.go.jp/data/shakai/2016/pdf/gaiyou2.pdf> (2020年12月8日)
- (8) 加藤 容子・金井 篤子 (2006). 共働き家庭における仕事家庭両立葛藤への対処行動の効果 心理学研究, 76, 511-518.
- (9) 伊藤 裕子・相良 順子・池田 政子 (2006). 多重役割に従事する子育て期夫婦の関係満足度と心理的健康—妻の就業形態による比較— 聖徳大学研究紀要 人文学部, 17, 33-40.
- (10) Pleck, J. H. (1976). The male sex role: Definitions, problems, and sources of change. *Journal of Social Issues*, 32, 155-164.
- (11) 渡邊 寛 (2017). 新しい男性役割尺度の開発と信頼性・妥当性の検討 心理学研究, 88, 251-259.
- (12) 渡邊 寛・松井 豊 (2017). 青年における男性役割と恋人との関係—交際期間, 関係満足度, 結婚可能性との関連を分析して— 筑波大学心理学研究, 54, 63-75.
- (13) 渡邊 寛 (2019). 上司の男らしさ要求による男性の職場感情と精神的な健康への影響 心理学研究, 90, 126-136.
- (14) 渡邊 寛・松井 豊・佐藤 有耕 (2020). 男性役割意識下エピソードとその時の認知や感情に関する探索的検討 筑波大学心理学研究, 58, 45-57.
- (15) McGreal, R., & Joseph, S. (1993). The Depression-Happiness Scale. *Psychological Reports*, 73, 1279-1282.
- (16) 土田 謙吾・五十嵐 透子 (2015). 青年期の対人ストレスコーピングとコーピング選択目的の関連—解決先送りコーピングに焦点をあてて— 上越教育大学心理教育相談研究, 14, 1-10.



# The correlation between perceived male role expectations and behaviors in relation to mental health: Based on traditional and modern new male roles

Ryota OKUZAWA\* · Toko IGARASHI\*\*

## ABSTRACT

The purpose of this study was to assess the perception of male role expectations and the state of male role behaviors in situations where male roles are required, such as college, the workplace, and life with a partner, as well as to clarify the relationship between the degree of congruence between two male roles and mental health.

Data were collected from 263 men aged 18 to 38 years (mean age 23.37) via Google forms and paper-based survey of four questionnaires. The analysis included the two male role behaviors and their work and cohabitation experiences.

The perceived and actual performed status of two types of male roles, traditional male roles and modern new male roles, were measured and compared in two areas of mental health: depressive tendency and subjective well-being. Also, the discrepancies between perceived expectations and actual two male roles performed were compared among the three categorized groups, with the two being equal, expectation significant, and actual performance significant. Additionally, the comparison was made with respect to work experience and whether or not they had ever cohabited or married.

Each factor of traditional and modern new male roles was found to be associated with mental health, implying that the frequency of actual behavior performed may be more relevant to mental health than the level of perceived expectation of male roles. The results also suggested that male roles associated with physical and mental strength, such as the modern new male role of "free from strength" and the traditional male role of "strong in both mind and body," may be especially related to mental health. The discussion included the questionnaires issues and recommendations for future research.